

# 研究通信

第92

1974年7月刊  
村落社会学研究会  
村務

中央大学  
文学部社会学研究室

## 本年度大会の開催地について

すでに会員各位の御承知のとおり、今年度の村研大会は東北でおひき受けることになりました。これまで東北では鳴子の「農民の家」から天童温泉まで多少とも個人的な(?)開催地を得てきたように思いましたが、今年のごく平凡なところに落着きました。それでも、蔵王山麓の紅葉を楽しんでいたきながらの討論もわるくはないはずと愚考いたしております。とりあえず、開催地についてお知らせ申しあげ、いづれ次の研究通信で詳細を連絡させていただきますことになりましょう。

一、とき 昭和四九年一〇月二(土)、一三(日)の両日

一、ところ 宮城県刈田郡蔵王町<sup>とがった</sup>刈田温泉「蔵王ハイッ」(雇備促進事業団保養所)

一、テーマ 「日本資本主義と家」

一、会場への交通 東北線白石駅で下車して現地までバスで四十分。仙台駅からはやはりバスで二時間です。

一、宿泊費 バスつき希望の方は一泊二食つきで三、五〇〇円前後。アウトバスで一泊二食で三、〇〇〇円前後です。「前後」とあいまいな書き方をしたのは一室に何人同宿するかで値段が違って来るからです。ほかに、昼食費三〇〇円、懇親会費一、〇〇〇円をいただくことになりました。およそ以上です。参加お申し込みは、いずれもつくわしい地図や交通の便をおしらせしたりえで、お受けすることにしたいと思います。とりあえず簡単なお知らせまで。

## 第二回研究会

六月一五日、仙台市川内の新しい東北大学文学部・教育学部棟会議室において、本年度共通課題「日本資本主義と家」に関する第二回研究会が、午後一時から、安孫子麟委員の報告を中心に開催された。参加者・塚本哲人、佐藤勉、鹿子木時子、増田忠雄、不破和彦、今泉芳郎、岩本由輝、島田隆、斉藤吉雄、細谷昌、多々羅翼、勝又猛、湯田勝、泉幽香、猪野直由、佐久間孝正、田原首和、それに東京から課題委員蓮見音彦、事務局島崎稔。

## 報告

### 「都市の家と農村の家」

— 課題報告の課題によせて —

安孫子 麟

最初に、私のこの報告の課題といえますか、問題設定を申しあげ

ておきます。私の場合は、自分のやっておきますことから当然なんですけれども、経済学の分野から家という問題を取り上げたらどうなるかという発想しかなかったのです。そうしますとご存知のとおり経済学というのは生産過程とか流通過程については非常に研究をやっておりますけど、消費過程あるいは生活、狭い意味の生活です。そういう問題になりませんとほとんどやっていないというのが事実です。そういう点ではこれは経済学の一つの盲点みたいなところで私達が考えていくとなると大変苦勞するところです。

前回の蓮見さんのご報告を拝見しますと、社会学の方では家と家族とを別に考えておられるわけですね。ところが経済学の方ではこれをはっきり分けるといふ意識はあんまりなかった。そういう点で家と家族はちがうんだといわれてみるとなるほど感じる点があるわけです。ただ、そういう問題をもう一べん我々の方のとらえ方に引き直して考えてみますと、家というんでしうか、家族というんでしうか、それのもっている役割とか機能とかいうものの歴史的な違いがあるわけで、これは明確に認識することができる。つまりその家という超世代的な連続体と、その時々々の現に存在する家族という人間集団との関係がどうなっているか、超世代的な連続体の家から家族がどのように規制されているか、あるいは家族のどのような行動がそういう連続体としての家をどう変えてゆくか、というふうにとらえることができます。そういう点の歴史的な段階の違いを基本的に決めているのは何かと考えてみますと、その時々々の生産関係あるいは一般に階級関係の中ではたす違いがあると同時に、その

基礎には家ないし家族に即した問題として生産力的なレベルでの問題があるわけです。

そうとらえた場合の家の機能というのは、生産力レベルに即して言えば、生産の中で果たす家の機能と生活の単位としての家の機能の結びつき方という問題として大きくつかまえることができるのではないか。結論からいってしまおうと、まず家が生産の単位でもあり、同時に生活の単位でもあるという、そういう結びつき方をしている段階。これは原始社会が崩壊して古代社会が成立した時から封建社会の解体に至るまでの、それから資本主義の中にも現在の農家のよりに一部存続してまいりますけれども、基本的な論理としては封建社会の解体によってなくなる、そういう非常に長い段階をつくっているわけです。それともう一つは生産の単位と生活の単位が切り離されて、家がある意味では生活の単位だけになってきて、生産の単位は、例えば企業というような形で別個のところにつくられるようになった段階。こういうかたちは、実はいろいろな歴史段階に部分的にはあらわれてまいります。大経営という形態とか、領主直営地というのも、一種のそれだと考えてもいいわけです。そのような歴史的段階の違いをふまえながら、まず生産の労働組織と生活のための組織という観点から資本主義によって成立してくる労働者の家族と資本主義の中にも残っている農民家族との基本的な違いをみていこうという事です。

第一回の委員会の時でしょうが、小池先生から、いま家の問題を考えるのはなぜか、そこをはっきりさせなければ今年の課題報告は

ほけてくるのではないか、という意見がだされたわけですが、それも、そういう点でいえば、私の今のような問題の立て方は、実は現在の村の解体あるいは農民層の分解という問題に重要なかわりあいをもつのだらうと思っております。つまり、現在の農民層分解が古典的な分解とはちがって非常に複雑な要因をもちながら従来とはかなり変わった形態で進んでいるわけですから、古典的な分解理論だけではなしにも少し分解論として共通する基礎的なものをとらえだし、そして現在の問題に引きつけることを考えますときに、いま申し上げたような問題のだし方は一定の有効性をもつだらうと思っております。一つだけ例をあげますと、例えば農業経済学の分野ではやくは綿谷尠夫さん、梶井功さん、それにここにいられる島崎さんなどが指摘されているわけですが、現在の分解を規定する一つの条件として農民の家族労働の評価が非常に確定した水準としてできつつあるという問題があります。古典的な規定でいきますと農民家族の生活費は肉体的最低限度まで下りうるということなのですけれども、そういうようなことはもはや起こらない。一定の生活水準を維持することができなければ農民は極めて容易に経営を放棄する。といってもまったく放棄するのではなくて一時放棄して出稼ぎに行くとか、兼業に家族員のだけかがでていくとかいう形で部分的には放棄する、いとも簡単に行なわれるわけです。このような古典的な命題からしますとそれに合致しないような現象、つまり、農民の家族労働報酬の水準が都市の勤労者の労働所得水準に、あるいは具体的には賃金水準にリンクされてくるという傾向が一体どこからでてくるのかと

いうような問題を考えるときに、単に生産単位としての旧来の経済学的な抽象的なとらえ方にとどまっていたのでは明確な形での解明がでてこないのではないだらうかと思えます。そこで先程いったように思いきって生産単位と生活単位という両者を経済学の問題の中に取り込んできてやっていったらどうなるかということ。そのためには実は、家事労働というものの位置づけまで入っていかないとほんとには解けないような気がしております。とくに広義の家事労働の中には育児とか教育の問題も入ってまいりますから、するとそのことはとりもおさず労働力の再生産過程になるわけにして、それを取りこまない経済学的なとらえ方の家というものは、非常に大きな欠陥を生ずるのではないのだらうかと思うわけです。これが第一に申し上げました問題の設定の意味です。

二番目に、生産過程での労働組織と生活面における組織という、家が従来もっておりました基本的な二つの機能の関係について考えてみたいと思えます。これが結合している形態から分離した形態へという問題になるわけにして、いってみれば農民層分解の問題であるしあるいは労働者層の形成の問題でもあります。ここで最初にとらえてみたい問題は、生産と生活が結合している形態は一体どういう意味をもつかということ。もともとこの両者が結合していたわけではなくて、そのことは原始社会を考えればよくわかります。それが一致したとき、結合するといつか、エンゲルスが示したようにそういう段階にはじめて家族が現われてくる。つまり共同体的な大きな生産の単位から小さいものへと変わっていく、その過程では

じめて家族というものができてくる。ですから逆に生産と生活とが分離していくという過程は、そういう意味で本来の家族的な構成が解体していく問題であると考えていいのではないか。つまり労働者家族は本当の意味での家とか家族の問題ではなくって、その一つの転化した形である、あるいは家族の構成原理がまったく違った観点で組み立てられるという歴史的变化を意味しているのではないかということです。

そこでつぎに具体的に農民家族を考えていくわけですが、そこでは経営と生活が分かち難く結合している。従ってそういう中では生産労働と家事労働とが明確に切れないような形で持続している状況があります。そして自由自在にどちら側からでも押して行くことができます。ただ、プッシュする力は一方的に生産の側からかかっています。例えば封建社会では農民は封建地代を払うために大変な労働を行なわなければならない。家事労働はこういう過程では簡単に圧迫されていくという状況がでてきます。それから又、自給経済から商品経済に入ってきますと、階級な搾取関係を除いて考えましても、自分達の生産したものの価格が下落したために生活ができないといった状況がでてきます。従って農民経営、とくに我々が問題にしている封建社会から資本主義社会における農民経営というものは、この生産単位、生産の労働組織という側面からプッシュを受けまして、生活単位としての確立が常に受身にまわるといふ状況があるわけです。そこが古典理論によると肉体最低限度まで下がりうる。

それに対して生産の単位と生活の単位が分離してしまつた労働者

家族、これを一応都市的な家族と考えてみますけれども、この場合には、家族にとつての直接的な目標というのは自分たちの生活の側があるだけでして、生産の方はいうまでもなく資本家の問題になってくるわけです。かれらが生産にかかわるかかわり方というのは自分の労働力を販売するということだけでして、本来賃金さえもらえばよい。そして、その賃金によって自分達の生活が守られるような状況があれば満足するわけですから、ここで家族の行動原理はまるっきり違った意味をもつてくるのではないかと思えます。もちろん農民家族にしても労働者家族にしても自分たちの生活、子孫を次々と育て人間として生き続けるということ、そういうことが究極的な目標にあつたわけなのですけれども、直接的なおかれた状況からでてくる意識に致しますと、農民家族の場合はぎりぎりの状況におかれると、生活よりも生産の方がまず勝負だという観念がでてくるわけです。ですから生活の豊かさということよりも一生涯生産的労働をやっているそちらの方が評価されてまいります。とくに支配階級からすれば家事労働からは剰余労働はほとんどとれないわけですから、剰余労働を収奪する生産的労働だけが非常な関心事になってまいります。そのことがイデオロギー教化として家族の行動原理を規定するようになってきたという面もあると思えます。ところが労働者家族の場合はそうではなくて生産的労働というのがどういふ形であれ、要するに労働力の販売した価格だけが主たる問題になってまいります。そしてこの賃金水準は生活との関係で常に考えられてくる、そのような行動原理が生まれてくるように思われるわけです。

す。

以上のような過程はいわゆる原蕃過程としてあるわけですが、それについて農民家族の生活と生産との結合が分離するという、今いったような側面をある意味ではもっと評価していかないとけないのではないだろうかと思うのです。つまりこの農民層分解の問題は本源的蓄積としてとらえれば、これはいうまでもなく資本の蓄積であり、資本側からみた労働力の蓄積になるわけですから、生活の問題が落ちてくるのは当たり前なんですが、単に資本蓄積の問題としてだけとらえるのではなくて旧来の家族の非常に大きな転機と考えてみますと、人間のいわば生活史的な変化もこれによって引き起こされているというこの歴史的な意味を考えていいのではないかと思うわけです。実はそのことがでてまいりませんと、マルクスがいう二重の意味での自由という問題の、いってみれば人間史的な意味がはつきりしないのではないだろうかという感じもするわけです。

第三の問題として、労働者家族と農民家族というこの両形態の比較を少しやっておこうと思います。例えばこの前達見さんが出されました家族の形態ですね。夫婦家族、直系家族、傍系家族という三つの分け方で、農民家族と労働者家族との違いが浮き彫りにされてくるのではないかと思うのです。つまり非常にわかり切ったことですが、農民家族の場合には生産的労働組織という側面をもちます。もちろん必ず補完的な共同体的関係は附随的にあるわけですが、基本的には家族労働を中心におこなわれますから生産過程に規定される家族基準というものがどうしても問題になる。これは生

産力そのものあり方に規定されるわけですが、社会的分業の問題だといってもいいかと思いますが、そのために同じ農民経営であっても生産力水準が違いますと家族規模は明らかに違う。日本でも平安末期の山村吉則の名主経営のようなもの、そういった規模とそれから江戸時代のはじめと終り、そして明治、昭和というようにそれぞれの段階における生産水準に規定された労働力編成がでてくるわけです、それが家族の規模と形態を規定してくる。これが第一番目の問題といえますと、第二番目には相続の問題が加わってくる。これはまた家族の規模に関係いたしますし、それから傍係を含むか直系だけかというような、そういった家族員のくみあわせですね、家族関係といったらいいでしょうが、そこを規定するものになる。相続というのはいうまでもなく家産があるから問題になるわけですが、家産というのは、家族が生産単位であれば必然的に生産手段の体系と内容的に同義となつてまいります。そういう家産は切り売りすればもはやまとまった生産手段の体系にはならないわけですから、当然それは一定の大きさになり、一定の組み合わせによって相続されていかなければならない。このような相続の問題が、その家族の中にどのようなものを残すかということに密接にかかりあつてくるのだと思われまます。たとえば傍系親族で、相続において分配することもできないし、あるいはまた独立させるために生産手段の体系をワンセット買ひ与えることもできないが、しかし放りだせば生きていくことはできないという状況では傍系親族をどうしても抱えこまざるを得ないという問題がでてまいります。

この点を労働者家族の方でみますと、この場合には生産単位という条件がないわけですから、家族規模というのは生活の水準だけで決まってくる。生活できるのであれば自分の家族は少なくともいいという一般的な原則がでてまいります。そういう中では積極的な所帯分離がおきてくるわけですし、所帯分離することによってむしろそれぞれの分離した諸家族が自立した生活をしていくための努力をしているということになります。労働者家族の場合、一般的に言えば核家族といえますか夫婦家族といえますか、そういったものが次第に主流になってくるという傾向は、そのような家のもっている機能の面から考えることができるのではないかと思います。それから相続にいたしましても労働者家族では生産手段としての家産の相続ということとは問題にならないわけですね。労働者といっても自分の家を建てたり貯金をもっていたり、わずかの財産をもっているというとはあるわけですね。生産手段としての相続ではなくより抽象的な私有財産相続ということだけが問題となる。従って、家産における相続と違って均分相続といふことが原則になってくる根拠がそこにあるわけですね。

その他、例えば労働力の再生産の仕方もある。この両形態で非常に違ってまいります。いりまでもなく農民家族の場合には出産・育児・教育などが一貫して家業のための自家労働力の再生産の問題として位置づけられてまいります。労働力の陶冶ということもまた自分の家族経営の内部で行なわれる。ですから例えば昔からよく言われますように子供が生まれないうことがその離縁の理由に十分なる。

そういうふうに農民家族にあっては自家労働力の確保ということが前面にでて、家事労働もそれを遂行するために行なわれていくという形になるわけですね。ところがそれに対して、労働者家族の場合には自分じしんの労働力の再生産はどうしても必要だが、子供の方は経済的意味では家族の直接的な必要にはならない。確かに老後を見てもらうために、子供を育てたいというよりなことが問題になるかも知れませんが、むしろもっと人間としての存続、人類としての存続といった問題になるわけですね。そこに例えば親子の愛情といったものがストレートに生きてくる根拠があるわけですね。そこで広い人間愛みたいな問題をもし考えないとしますと、平気で子供を捨てるといふ現象が逆に起きてくる。子供を捨てるということは、農民家族でも労働力再生産だけがネライであること、この場合には多くなりすぎると間引くということがしばしばおこなわれた。しかしそれはまったく違った観点から労働者家族における子孫の位置づけができてくる。そこでこの親と子の関係を支えるものは、家族そのものもっている生産的な機能とか生活的な機能とかいう経済的範ちゅう、物質的側面からではなくて、精神的なというか人間らしい意識あるいはイデオロギーの要素が全面的にあらわれないと家族というのは大変素漠たる状況になるという面をもっているのだらうと思われまます。

四番目の問題として日本における労働者家族と農民家族との関係を歴史的に少し検討していかなければならないのですが、これが本論で、今までのすべては序論だといっているわけですね。しかしこ

では歴史分析を全部やる時間がありませんから結論的な部分をいくつか申し上げてみたいのですが、一つは分解の経過、つまり労働者形成の問題です。前回の通信をみますと岩本君は、日本資本主義に規定されて家とか土地とかがこうだったので、その逆ではない、と積極的な主張をしています。ただこういう抽象的な言い方だけだと、例えば山田盛太郎さんがとらえたように、日本資本主義の基底としての土地所有あるいは農民経営のあり方というものと岩本君がいつていることは、まったく対立するのさういかよくはわかりません。日本における両者の関係を見ていった場合に、どちら側がどちらを規定したかというあたりは、やっぱり今年の大会の問題としてぜひ明らかにしてほしい感じがするわけです。それも戦前資本主義の場合と戦後資本主義の場合とで違いがでてくるかも知れない。ここでは戦前、戦後の問題を別々に問題提起したいと思います。

それは、労働者形成が日本でどのような形で進化したかということに、非常によくあらわれてまいります。つまり、よくいわれているように日本の場合は、かなり完成した資本主義的な生産形態が、具体的にいえば機械制生産が外国から輸入されるといりかたちで発展してくる。マニユファクチュアそのものはきわめて短い期間、しかも十分発展する暇なしに一挙に機械工業段階へと入っていく。そのような日本資本主義の展開形態に規定されて労働者階級の形成は西ヨーロッパ的な農民層の典型的な分解、つまり農民経営の壊滅を伴うような農民層分解として行なわれてきたのではない。むしろまるごと労働者になったと言えれば待が一番はっきりしている。農民

の方は確かにいわゆる夜逃げ的な形態もなければありませんけど、それよりも圧倒的な部分はやはり農民家族からの一部が労働者としてでてゆく、あるいは一定期間出稼ぎの形で出てゆくという形態になるわけです。そうしますと、さっきみたような生産と生活の分離の持っている意義が、日本の労働者の場合にはあまいな形でしかあらわれてこない。生産組織と生活組織との結合している状態、つまり農民家族の解体の上に労働者家族ができたというのではなくて、それはそれとして持続しながら、しかもそこには一定の家族関係、血縁関係を残したまま労働者家族が形成されてくるという面があります。他方、江戸時代から続いているいわゆる町人家族といいますが職人家族といえますか、そういうものについても、例えば大工さんとか左官屋さんとか、自分である程度生活手段を持ちながら大工の棟梁といったところにとめられていくという、分離したようにならないような形で実質的には賃労働者化しているということもあります。そのように考えてみますと、純然たる労働者家族としてきれいにでてくるのは非常に限られた分野ではないだろうかと思われわけです。それがより多く集積されていったのは、軍の工場を中心とする当時の機械工場、総じて軍需工場的なものでしょう。それに対して生産旋回のもっとも華々しい部面、紡績、製糸部面などにおいては、ご存知のとおり女子労働者を使うわけでして、これは農民家族、農民経営の否定なしに、あるいはむしろ農民経営の支えのもとに労働者としてある一定時期立ち現われるわけですから、このよ

はないわけです。

そういったことを果たして獨本主義の性格からそうなったのだと説明するのか、そのような労働力を資本のもとに包摂してきたから日本の資本主義は諸外国の機械制工業と十分たちうちできるような条件を作り得たのか、というところはたしかに議論が別れるところだろうと思います。ここでこの点に深入りすることは避けませんが、ともかくも資本主義的な労働者家族のでき方自体に農民家族との関係が非常に特殊な形であって、そのことが日本の労働者家族のいわば農村的性格をずっと残すことになったのだと思われたいです。この点はお自の問題だけではなくて、その後の状況からみても例えば労働者の生活自体が農民家族によって支えられるという側面、それからまた忙しい時にはいつでも農村に帰って働くというようなそういう結合の仕方を続けてきたのだらうと思います。

当初の原著過程のあり方がこのような形でスタートしてまうから、明治30年代に資本主義が確立した時、それを逆にいうと農民家族が全体として潜在的過剰人口として位置づけられたともいえるわけですが、それでも、そういうた農民家族の中からのような形で労働者への転化がなされていったかといえ、基本的には今申し上げたのと同じような形態が、一般的にはよりゆるやかな形で進む。それは相対的過剰人口の流出ですから何よりもまず生産力的な発展と一義的にかわるわけではなく、一面では資本の蓄積の状況に、他面では農業生産力の発展というにかかわってまいります。ところが日本におけるこの農業生産力の展開の形態というのは、農業を資本主義

が征服していないから当然そののですけれども、労働節約型ではなくて、労働集約型の農事改良としてあらわれてまいりますから、有機的構成の問題として、 $\Delta$ が容易に大きくなっていかない。従って農民家族ないし農民経営から反発される過剰人口もそれほど急速には伸びてまいります。ごくゆるやかにぼつりぼつりと出る形をとるわけです。労働者家族と農民家族とのそのような結びつき方がそれぞれの生産力構造を基礎としてできている。そういう結びつき方があるからこそ戦前日本資本の蓄積構造が完成するわけで、それともう一つ植民地を入れますと完全にこれで戦前型の蓄積構造ができ上がってくる。以上はごく常識的な線での発達にすぎず、ほんとうにそういう考え方が当たるかどうかという点で、実は大正期の家計調査と現在の家計調査とを対比してやりかけているのですけれども、まだ申し上げられないのが残念です。ともかく、そんなこともひっくりめながら、都市的な家族と農民家族との関連の問題をめぐって、ほんとうはそれ就業構造という労働市場の問題、それから今いった生活レベルでの家事労働のあり方などいくつかの指標をとって、両者の違いだけでなく関連、それから展開方向をおさえてみると戦前期についてかなりわかってくるのではないかと思っております。

戦後の場合一番大きな変化は冒頭に申しましたように、農民家族の行動原理が非常に違ってきたという面があります。それは何よりも家計費水準、いわゆるu水準が確定した水準としてあらわれてくる。つまり $\Delta$ 、このuはプラスかマイナスかですが、この家計費の



水準がかってのように弾力的に幅をもって押し下げられればどんな下がってくるというのではなく、下の方が非常に硬直的になってきているわけです。そうなりますと、その線がいわば農民の就業構造を決める分岐点になってくる。肉体最低限度まで我慢しないで、オートバイを買えないということだけで働きに出るということになるわけです。そのことが実は無意識のうちに農民家族の変化をもたらしている、古典的な規定による農民家族あるいは戦前的な段階規定を充けた農民家族と異質な農民家族になってきている。

この変化がどのようにして起きてくるのかという問題ですが、それには外的な条件と内的な条件とを分けることができます。論者によりまして重点のおきどころがちがいます。一番早い山田盛太郎さんの場合でいえば家族労働の民主化という意味での内的要因をあげます。この民主化というのをどう解釈するかはいろいろ具体的な分析を必要とするのだと思うのですけれども、おそらく家族労働評価がどういう観点でなされるか、つまり農民経営がどれだけ深く価値法則の中に入りこんで、その中でどれだけ強く家族労働を意識し、それによって競争するのかという条件がかかっているのではないかと思うわけです。民主化というのは最後にはイデオロギー的なものにもいくのかも知れませんが、基本的には戦後の生産力構造の中からその問題を考えてみなければいけないわけです。

外的条件として通常あげられますのは労働市場の展開の仕方です。これをあげる人は多いわけで梶井さんなんかこの面を強調される方です。つまりいつでも自由に労働力が販売できるといふ状況ができ

てくると自分の生活水準についても泣き寝入りはしなくなる、苦しければよそにいった賃金をとってくるといふ状況ができてくる。しかしこういう外的条件の問題は、高度成長期に入ってこないといふ提起できないこととなります。少くとも一九五五年段階までは就業構造というのは広く深く開かれていたわけではありませんが、むしろ本格化するのには民間設備投資が労働力の限界につき当たった時期、従って一九五八年前後ではないかと思えます。ところが山田さんの場合は、ご存知のとおり農地改革の一つの成果として位置づけられてくるわけでした、少なくとも外的要因を強調する人よりも、五、六年もしくは七、八年先に問題がスタートするといふ形になります。

それでそのような状況ができたといふことは、言ってみれば、外的条件も両方引くくめて現在の農民家族の行動原理が非常に労働者家族に似た面をもつようになってきている。特に後継者の流出という問題はまったくそうで、親の職業と違ひのが当たり前だと考えてくるわけです。そう考えることは労働者家族ならばなんでもないことなのですけれど、農民家族の場合は土地を基礎とする家産をもっているわけです。それをいわば性格転化させることになっている。家畜とか農機具というのは後継ぎがいなくなれば何の意味もないわけですが、とくに土地はそうではなく、生産手段の体系としてあったものがそのようなものとしてはこわれてしまっても、純然たる抽象的な意味での私有財産として残り続けるということになります。だから私有財産として十分に生きてくる土地のようなものはまったく放棄する気はないわけでした、むしろ自分が労働者家族として都

市へでていく時の安全弁、最後のよりどころになっている。

このような農民家族からでてきた人達が安定的な都市労働者家族にすべてがなるかという点、依然として農村への還流がある。そしてこの還流部分というのが、特に最近の重要な傾向としては、それ自体が潜在的過剰人口にもどるのではなくて、流動的過剰人口として農村と都市とを動き回るといふような状況がでてきている。ここでまた新たな意味での労働者家族と農民家族との関係があらわれてくるわけでしてそれに伴う相続の問題、家族の人間関係、家事労働のあり方、教育の問題、家族形態、家族関係の問題などが、もう一度そういう観点から整理されていくべきではないかと思ひついで、最後の方はたいへん切りつめてしまいました。が、経済学の方から接近した課題というのはこんなところにあるのではないか、ということをおわかり頂ければ幸いです。

### 討論要旨

討論に入り先ず前号研究通信にのせられた意見報告と当日の安孫子報告との、農地改革後の農民家族の形態的变化についての理解の相違をめぐって質問がだされ、やはり三〇年を二期として二段階的にその変化を認めるべきではないかという意見が報告者から示された。しかし、その改革後の農民家族の形態的变化を論ずる場合も、単なる家族形態論——周期論に終始するのではなく、戦後過程における農民家族の家長制の解体（家族労働力の民主化・自立化）といった本質的な問題のなかに位置づけられてその

意味が問われなければならぬことが指摘された。

家長制的家族の解体に対し、要因として、内的な農業生産力の発展、外的な労働市場の展開、そのそれぞれがおよぼした作用力について論議がかわされたが、現実にもみる広汎な「農家経済の解体」のなかで、家族労働の評価の問題を体制的なかかわり（低賃金構造の再編）のなかで重視しなければならぬこと、さらにその際、昨年度大会において小池会員から出された「いま、何故、家族をとりあげるのか」といった問題提起と関聯して、形態論的な「核家族論」のなかにひそむる種のイデオロギー的側面として、そこに社会的安定要因を求めていこうとする風潮の危険性に対し、現実に進む農家経済の解体とそれにとまらぬ農家——農村のさまざまな不安定要因のもつ体制的意味を明らかにすべきことが説かれた。

低賃金構造の再編と関聯して、家族労働力の評価基準として、農村の家族と都市における賃労働者・小営業者の家族との異同についても論議されたが、比較のためには特に都市における小営業者家族の実態把握の必要性が痛感された。

そのほか討論は多岐にわたる多くの重要な指摘がなされたのであるが、事務局としてはもっぱら財政上の理由から、切角送られてきた討論速記の掲載を断念し、かなり恣意的な要約にとどめるをえなかつたこと、御了承いただきたいと思う。

（討論要旨文責・島崎）

## 大会報告者の公募について

本年度共通課題「日本資本主義と家」（研究通信九〇、九一号参照）の報告者ならびに自由課題の報告者を左記の通り募集します。各分野の会員の方から積極的な応募を期待します。

- 一、申込〆切 七月二十六日まで。会報の発行がおくれましたのに、急で大変恐縮ですが、二七日の合同委員会で決定したいと考えておりますので、御発表の意志とテーマだけを至急お電話なりはがきで御通知いただければ幸いです。

- 一、報告要旨 八月末日まで。四百字詰原稿用紙 五枚以内。
- 一、申込先 村研事務局

東京都千代田区神田駿河台三一九（甲一〇二）  
中央大学文学部社会学研究室

（電話）〇三一二九二一三一一 内線四六七

なお七月二五日より夏休みに入りますので、連絡いただいてもつかない場合などがあるかと思えますので、その節は左記にお願いします。夜間でも結構です。

東京都新宿区中新宿三一一一四

（甲一六一）

島崎 稔（電話）〇三一九五一一一六三四

## 研究会のお知らせ

第三回研究会を次の通り開催しますので会員皆様のご参加をお待ちしています。

- 一、日時 七月二十七日（土） 午後一時より
- 一、場所 本郷学士会館（赤門横）電話八一四一五五四一
- 一、報告者 高橋明善会員、コメンター 安原茂会員
- 一、課題 家について（仮題）

なお、研究会終了後、合同委員会を予定しておりますので、各会員の方は必ずご出席下さいますようお願い致します。

## 会員動向

### ◇ 新入会員

- 小山 統治 国学院大学大学院 甲一六五 東京都中野区若宮三一二七一二三 吉田方（電話）〇三一二三三八一七九七九
- 春日 文雄 宇都宮大学農学部 甲三二〇 栃木県宇都宮市平松本町五三三五一三
- 大野 晃 女子栄養大学

宇一九七 福生市熊川二七九(電話) 〇四二五―五  
一―一八四九)

○住田 正樹 香川大学教育学部

〒七六〇 香川県高松市香西東町三九六一四

◇ 所属・住所等の変更

(新所属・新住所のみを掲げました)

○青木 秀男

〒七三一〇一 広島市沼田町大塚 広島修道大学  
人文学部内

○安孫子 謙

〒九八〇 仙台市荒巻字青葉一八六(電話) 〇三二  
二―二九―二八七六)

○安藤慶一郎

金城学院大学文学部(社会学科) (名古屋市守山区  
大森)

○上田喜三郎

〒一五四 東京都世田谷区下馬二二〇―一四 下  
馬職員住宅五一四号

○大内 雅利

〒一八二 東京都狛江市和泉二二二四 第一いずみ  
荘

◇ 退 会

○堀 一郎 成城大学文学部

△住所不明会員についてのお願SV

新しい会員名簿を作成したいと準備中ですが、会報をお送りして

も住所不明で返送されてくる会員があり、大変困っております。前号でお願いした上田一雄会員については斎藤正二会員よりお便りいただきわかりました。どうも有難うございました。次の方をご存知の方がありませんたら、至急お知らせ下さい。

○伊藤 繁 元北海道大学農学部院生

○木原健太郎 元名古屋大学教育学部

○佐々木泰雄 元農林省農業土木試験場

○馬場 昭 日本大学農獣医学部

○清水 由文 関西学院大学大学院

○中川 勝雄 北海道立総合経済研究所

○中川 順子 名寄女子短期大学

新刊案内

岩本由輝『明治期における地主経営の展開』

はじめに・第一章 近世岡谷における農村構造・第二章 明治期における製米業の展開と農民層の分解・第三章 明治期における今井作内家の地主経営・第四章 明治期における今井四郎左衛門の農業経営・〔補論〕 製米業の発達と水利組織の変化・あとがき

なお村研会員には二割引の便宜を計らうとのこと、申込先は

〒一〇一 東京都千代田区神田一 一三 一三

山川出版社 編輯部 鶴崎信夫宛

定価二五〇〇円(八掛十送料)